

農業工学の国際化

日本農業工学会とC I G R -

日本農業工学会 会長 木谷 収

先進国の農業人口は10%を割っているところが多いが、途上国を含めて考えると現在でも、世界人口の2分の1以上が農業に従事している。膨大な食料を生産し、労働人口の半分以上を雇用している農業は、世界最大の産業である。このことは、21世紀になっても変わらないであろう。また、人口増にみあう食料生産の増加と環境保全機能の強化のため、ハイテク技術が導入されるにつれて、工学的手法が農業の中で次第に重要になり、農業工学がますます重要になってきている。

グローバル化の波の中で、農業工学も国際化が進んできた。多くの東大農業工学関係出身者が、いろいろな形で国際活動に参加し、貢献してきた。この傾向は、今後ますます強まるであろう。筆者は、現在たまたま日本農業工学会の会長をつとめていることから、日本農業工学会の立場から、100周年のお祝いを申し上げる機会を頂いた。ここに会を代表して心からの祝意を表するとともに、21世紀に向けて、東大生物・環境工学分野がますます発展し、一層の国際化を通じて世界の農業に貢献することを祈念申し上げます。

日本農業工学会は、本来、国際農業工学会(C I G R)に加入し日本の国際化を進めるために作られた。正確に言えば、日本国際農業工学会という農業工学関係学会の連合体を作ってC I G Rに加入していたが、この組織が休眠状態になって自然退会のような形になっていたのを1984年に白井清恒会長を中心として、日本農業工学会の名の下に再建しC I G Rに再加入した。これを機会に日本の農業工学界での国際化が進んだと言ってよいであろう。1990年頃から、当時日本農業工学会の中川昭一郎会長が日本学術会議のC I G R加盟の準備をはじめられ、1995年に実現した。また、1993年には、アジアで初めてのC I G R総会が東京で開かれ佐野文彦日本農業工学会会長が、C I G Rの創立70周年と新世紀の幕開けを記念する特別の世界大会を提案し、本年11月の筑波での世界大会への道を拓かれ、続いて田淵俊雄会長が実現に向け推進された。

1994年にミラノで行われたC I G R総会で、筆者は新しい会則の下でC I G R次期会長に選出された。同時にC I G R第2部会長に橋本康教授が選ばれ、さらに日本から5人の部会理事が出て、日本のC I G Rへの貢献と国際化が急ピッチで進むこととなった。新会則では次期会長、会長、前会長の順序で2年ずつ、計6年間幹部会メンバーとして奉仕して、継続性を保つことになっている。C I G Rは過去60数年にわたって完全に欧米主導の国際学会であった。欧米以外から初めての会長として、筆者はC I G Rの世界化に力を注いできた。途上国会員の増加、世界共通で利用できるC I G R農業工学ハンドブックの編集出版、電子学会誌の創設などに心を砕いた。筑波での総会では70年の歴史で初めて途上国からの会長が就任することになっている。

筑波でのC I G R世界大会の準備は、日本農業工学会橋本康前会長が周到に進められてきた。筆者がこの文をしたためている今も、日本農業工学会構成会員である11学協会のご協力で厳しい経済環境の中を着々と用意が進んでいる。この紙面をお借りして、特にご支援、ご協力、ご指導を頂いた農業工学、生物環境工学関連の皆様にご心からお礼申し上げます。

今後日本農業工学会は、C I G R対応やシンポジウムの開催のみならず、国際化時代に向け、農業工学部門の技術者教育認定制度の確立等にも力を注いで行くことになりましょう。何とぞ、一層のご支援をお願いいたします。